

## 総評

### 第四回国際学生フォーラムに参加して

西田 昌之 (チェンマイ大学)

東日本大震災から四年、震災記憶の風化や復興への関心の低下が課題として挙がっている中で、日本語や日本事情を学ぶ学生が世界 10 か国から集まり、改めて日本語を軸とした災害協力の可能性について考える機会を与えて下さったことに感謝いたします。

特に東日本大震災においては、諸外国から多くの支援の手が差し伸べられていながら、日本はその手をなかなか取ることができませんでした。そのため、災害経験の反省として、現在、支援を受け入れる力、「受援力」の獲得が求められています。この「受援力」の獲得には平時からの交流と対話が重要になります。それぞれの国の災害に対する認識、文化、制度、そして各国の人々の人なりを相互に知っておく必要があります。

また世界各国にとっても、今後も確実に起こる大災害に際して、相互連携して災害への対応を進めるために、その素地を形成しておくことは大切なことです。本フォーラムはまさに国境を越えた新たな災害支援連繋の構築がさらに進むことを予感させる素晴らしい企画でした。

#### 1. 陸前高田実習の報告

3月10日に行われたお茶の水女子大学の陸前高田実習(「地域研究実習Ⅱ」、「地域調査方法論演習」)の学生報告では、被災後の陸前高田の街づくり、震災経験の語り継ぎ、東京と現地との意識のずれなど、震災後四年目をむかえて顕在化してきた問題について、現地の人々の声を通じて伝えていただきました。この報告における隠れたテーマは「時」であったように思われます。陸前高田観光物産協会副会長の實吉義正氏は「時」が、語ることでできなかった被災者に次世代のために語ることを可能にしたという「時薬」(ときぐすり)という概念を伝えてくれました。他方で学生たちや米崎小学校仮設住宅自治会長佐藤和夫氏は、震災の経過と共に忘れられてしまう災害記憶を残すために桜ラインと言われる桜の植樹を行ったことを、「時」による忘却への抗いとして聞かせて頂きました。また、三井俊介氏は大学を卒業してから陸前高田に住み込み、失敗を重ねながら地域の人たちと復興プロジェクトを進めていく姿は、「時」が地域住民とボランティア・外部支援者との関係性を成長させていくという、「時」からの学びの可能性を示唆する発表でした。

#### 2. 国際学生フォーラム発表

国際学生フォーラム発表においては、素晴らしい日本語で各国の災害対応の状況、今後の災害協力の可能性について提案して頂きました。その発表の中では、各国の災害対応が、それぞれの国の自然環境、社会環境、人々の認識によって変わることが明らかにされました。その上で、それぞれの国の強み、弱みをきちんと把握しながら、学生のできる災害対応の模索をすることが重要であることが示されました。

しかし、発表の内容以上に本発表の重要なメッセージは、日本語や日本文化を通じて学ぶ中で、より日本に親しみを感じ、共感してくれていた人々が世界中に多くいたという事実であるように思います。東日本震災時に、「どのように日本を支援したらよいのだろうか」と真剣に考えていたと多くの学生が告白してくれました。その思いから様々なアイデアを出し、学生によっては実際に支援活動を起こしてくれていました。

実際問題としては、まだなかなか国際的に相互に支援を行うには、難しいことが多いように感じました。しかし、今回集まった学生が今回の経験から、それぞれの国の特徴を生かして、相互に助け合える関係性を構築し、より豊かな社会に向かっていけることを願っております。

最後にタイ・チェンマイ大学より学生2名と教員1名を参加させて頂きましたこと心より感謝いたします。北部タイは日本の様な大規模災害の経験は少なく、なかなか当事者としての意識を持つことできません。このようなフォーラムの中で日本語を通じて、学生間で防災協力・連携の意識が共有できたことは、とても意義深いことであったと思っております。ありがとうございました。

## 学生フォーラムに参加して

諏訪昭宏（釜山外国語大学）

「悲しみを喜びに」これは、本国際フォーラムの冒頭で森山教授がおっしゃった言葉であるが、8カ国10大学の学生たちの発表とディスカッションを聞きながら、この言葉が頭の中で何度も繰り返されたことを今でも覚えている。「被災者の心から悲しみを消すことはできないのかもしれないが、心に寄り添うことで、暗闇に明かりを灯し、喜びを感じてもらうことで、悲しみを減らすことはできるのだ」と。

今回、時間的な都合から、12日（木）と13日（金）の二日間にかけて行われた国際フォーラムにのみ参加させていただいたが、どの学生たちの発表も、当時のことを振り返り、自分自身の問題として捉えなおし、大学生としてできることを考え、熱心に語っていたことがとても印象的であった。文化と言語の壁を越えつなろうとしている学生たちの姿が何より頼もしく、そして被災地である岩手出身の自分にとっては本当に嬉しかった。

それぞれの発表は、国の数だけ多様な考えがあることを再確認させられ、また、「寄付」に対する考え方の違いなど、異文化にも触れることができ自分自身学びの多い2日間であった。それぞれの国における過去の災害を知り、そこから生まれた教訓を共有できたことは、参加者にとっては大きな財産となったことは間違いない。特に、「夢を諦めかけた子供たちにもう一度夢を持たせることができた」という日本人学生の発表には大きな感動を覚えた。韓国でもここ数年、頻繁に耳にするようになった「才能寄付」、いわゆる「プロボノ（pro bono publico＝公共の利益のために自分の才能や知識を無料で提供すること）」であるが、まさにこの考え方こそが「大学生にできること」を考えたとき大切な視点であると思った。アメリカの学生の発表にあった「PTSD」を広く理解させることであったり、中国の学生の発表にあった「アプリ」を作ることであったり、韓国・アメリカの学生の発表にあった「チャリティー」や、SNSなどでつながる世界の友人たちに「募金」を呼びかけることなど、得意とする日本語を活かし、友達の輪を活かし、さらには大学で学んでいる専門知識やそれぞれが得意とすることを、被災者のために還元するという行動こそが「大学生にできること」の一つなのかもしれない。

このフォーラムを通して、参加した学生たちは心の中に大きな変化が生まれたはずである。是非それを胸の内にとどめることなく、それぞれの国に帰ってからも、周りの人々に伝え、そして、今回に限らず、今後も同じ目的に向いつながっていくことができれば、たとえ世界のどこかで同じような震災が起きたとしても、助け合い、何かを成し遂げてくれるであろう、そういった期待と可能性の高さを感じた2日間であった。

## 総評

森田桂花（お茶の水女子大学）

「私たち大学生は子どもではないし、大人でもない。そんな私たちに何ができるだろう」本学学生が参加者全員に呼びかけたこの言葉が 10 日間で一番印象的だった。主体的に、そして真剣に、若者らしい柔軟な姿勢と自由な発想で、国内外の学生が震災復興や国際連携について意見を出し合う姿に、胸が熱くなった。

3 月 9 日の開講式では羽入佐和子学長にご挨拶いただき、本学の歴史やグローバル化の取り組みに関してのご紹介をいただいた。

3 月 10 日のグローバル文化学環報告セミナーにおいては、震災で肉親を失くされた實吉義正氏などから、震災後の凄まじい惨状についてのお話があった。それらを初めて聞く学生の何人かにとっては、衝撃が大きすぎたようだ。私の前職が、アジアやアフリカの被災地や紛争国で復興支援だったことを以前から知る学生が、先生はどうしてわざわざ凄まじい現場での仕事を選んだのですかとその日聞いて来たほど、彼女らの「被災地」のイメージは一変したらしい。

3 月 11 日は、国立博物館訪問と代々木公園で開催された震災追悼イベントへの参加を行った。国立博物館では震災後の文化財復興の特別展を観覧した。震災を乗り越えた歴史文化財（「江戸時代の打掛」「尋常小学校教科書」など）について本学学生が英語と日本語を織り交ぜながら海外からの学生に説明してしる姿は大変微笑ましかった。

3 月 12・13 日のフォーラムでは、「メディアで伝えられることは事実ではあるが真実ではない」という 10 日の實吉義正氏の言葉を受け「メディアリテラシー」という概念についての議論もあった。震災後、日本政府は福島の問題について安全だと再三報道していたが、海外メディアはそれと異なる報道をしていたことを、この日初めて知る学生も多くいた。パラダイム転換を迫られた学生の中には、それを受け止めるのが辛そうな方もいた。しかし、異文化や異なる視点・価値観に出会い、深く考え、悩んだ経験は、参加学生がグローバル人材へと成長するのに必要不可欠な通過点であったように思える。

最後に、この場をお借りして、海外の学生さんが寮で使用する消耗品の準備など、本当にたくさんの小さな目立たない作業に、終始積極的に取り組んでくれた学生リーダーの松下華菜さん・張孺心さんにお礼を言いたい。

また、フォーラム運営全体を見渡し、いつも適切なお助言を与えてくださり、また、問題が生じたときには迅速に学内外との調整をしてくださった森山教授に心より御礼申し上げます。今回参加した全ての学生は、森山教授の想いを受け止め、今後、他国で起きる惨

事でも自国の惨事として捉えられる、「心の国境を持たない」人材に成長していくことだと思ふ。本フォーラムでの議論が有意義なものとなったのは、フォーラム開催期間だけではなく、数ヶ月前から本学学生と海外の学生が交流し、準備を行ってきた賜物である。このフォーラムの仕組みは大変素晴らしく、それだけに事前準備には労力を必要としたが、学生が主体的に動くよう、後方で差配される森山教授の指導力・教育力に、尊敬の念を禁じ得なかった。

今回のフォーラムで得られた知見と、過去3回のフォーラム参加者を含めた、グローバル人材のネットワークが、世界中により広がっていくことを心より祈念している。

(グローバル教育センター講師)

フォーラムの成功がこのままで終わることがないように

森山新（お茶の水女子大学）

国際学生フォーラムは今年で第4回になった。2012年3月の第1回は「東日本大震災の復興と私たち：ローカル／グローバルに考える」と題し、東日本大震災を世界ではどのように報じられ、どのような支援が行われたかが話し合われた。第2回は「世界のエネルギー・環境問題を考える：東日本大震災を教訓に」と題し、震災で大きな被害をもたらした原子力発電について、世界の現状と存続の是非を討論した。第3回は2月にヴァッサー大学、3月にお茶の水女子大学において、「震災復興と国際連携：世界の災害、その時あなたは何かができますか」をテーマに、東日本大震災を教訓に、世界的な大災害に関し、どのような国際連携がありうるかについての模索をはじめた。そして今回は、「震災復興を越えたグローバルな対話と協力」と題し、若者としての我々が実際に実行可能な行動について討論し、それぞれの大学から具体的な提案が示された。同時に今回は、フォーラムの主導権を学生たちに委ね、国際的イベントを自らの力で成功させることで、今後求められる協働の経験を積み、スキルを磨く場を提供した。

私はこれまでこの国際学生フォーラムを担当しながら、グローバル時代に求められる外国語教育のあり方を模索してきた。これまで、外国語教育では、外国の言語もしくは文化を学ぶことが主たる目的に据えられてきた。いうまでもなく、言語を学ぶのは様々な外国の相手とコミュニケーションのためであり、文化を学ぶのは、相手に対する理解を深めるためである。しかし、こうした外国語教育の目的がグローバル時代のニーズに真に生かされているとは思われない。コミュニケーションの道具としての言語の役割、相手を理解するための異文化理解が真にその目的を達成するためには、世界が抱えるグローバルな難題や、国と国との間に立ちどころな難題に、言語、文化の違いを超えて活発に議論されることが必要であろう。

その意味で、かつてない大きな被害をもたらした東日本大震災をテーマに、海外の学生は日本語をツールに、日本の学生は英語をツールにして、世界的な大災害にどう立ち向かうか、若者として何ができるかについて話し合う、この国際学生フォーラムは、グローバル時代のニーズにマッチした教育の姿であろう。

同時に言語教育は、各人のアイデンティティ形成にも密接に絡み合っている。人は母語、母国語を通じ、それぞれのナショナルアイデンティティが形作られると言われるが、最近外国語教育を通じ、インターナショナルアイデンティティを形成する可能性に対する議論が始まっている（Byram 2008、森山 2012、2013、2015）。その最たる例がヨー

ロッパの複言語教育 (plurilingual education) で、欧州連合内の言語をお互いに学び合うことで、ナショナルアイデンティティを超え、ヨーロッパ市民としてのアイデンティティ形成をめざしているのである。本フォーラムでも、世界の学生が日本語を用い、日本の学生が英語などの外国語を用いて世界規模の問題を議論する場を提供しているが、もし各人の心の中で、いまだ偏狭で排他的なナショナリズムやナショナルアイデンティティが残っているとすれば、それが打破され、インターナショナルなアイデンティティ形成の第一歩が築けると期待している。

もちろんそれは容易なものではなく、10 日間のフォーラムでどうこうできる類のものではない。そこで、本フォーラムを1 回限りのものとして行うのではなく、持続可能な形を模索する。それは学生自らが今回、学生主体でフォーラムに参加することで育まれた協働のスキルと、そこで形成された世界的なネットワークを用い、何らかの行動を持続させ、そのような持続と継続の中で我々のアイデンティティをより豊かで広がりを持ったものとする、要するに、世界を抱く大きな心、グローバルな心を育むことができる、と考えている。

これまでフォーラムの参加者はみな、大きな学びを得、これからも友人の絆を保ちつつ共に生きていこうと誓い合いながら、それぞれの国に帰って行った。しかしながら、残念なことに、それを持続することは決して容易なことではなかった。そのような困難は今回も同様である。しかし、今回は、今までになく学生が自らフォーラムを作り上げてくれただけに、そこで育まれたモチベーションと国際イベントを成功させたという自信は、きっとその壁を超えて大きな持続の力となってくれると信じている。今回、昨年12月に集まってくれた20名余りの日本の学生は、海外から被災地日本を訪れる学生を迎えるために、ある時はバディとして、またある時はフォーラムのボランティアスタッフとして、最大限のおもてなしをしてくれた。それは海外から来た学生の心にきっと届いたに違いない。またそれは将来、本学の学生が再び彼らのもとを訪ねた時、おなじようなおもてなしを受けることで、その絆はより強固なものとなってくれると思う。そういった経験の中で、これまではどこか遠いところで起きたことと、冷たく見過ごしていたとしても、これからは、自分として何かをしたいと感じるようになるにちがいない。

どうかこのフォーラムの成功がこのままで終わることがないように。世界の若者が日本で起きたこの悲しみに心を痛め、手を差し伸べてくれたのと同様、日本の若者が、世界の若者がみな、世界のどこかで引き起こされる悲しみに心を痛め、手を差し伸べる、そのような若人として育ってほしいと心から願ってやまない。若者の心に国境が取り払われるとき、国と国との対立は和解へと変わり、対立の絶えないこの世界は少しでも住みやすい村になっていくと信じている。

参考文献

Byram, M. (2008) *From Foreign Language Education to Education for International Citizenship*. Multilingual Matters.

森山新 (2012) 「複言語・複文化主義と東アジアの共生」 『研究年報』 9, 185-192、お茶の水女子大学比較日本学研究教育センター  
(<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/53126>)

森山新 (2013) 「グローバル時代の日本語教育・異文化理解教育」 『日本語文学』 60, 137-154  
(<http://jsl.cf.ocha.ac.jp/morishin1003>)

森山新 (2015) 「Citizenship 教育としての第二言語・文化教育」、2015 年大葉大学日語教学国際学術研究会講演原稿

(国際学生フォーラム実施責任者)

追伸) 3月17日、釜山外大の河純鳳君がFacebook上にグループ「国際大学生連盟 (仮)」を設立してくれました。交流の拡大を心から期待しています。